

故山口健助君の記念文集

「かがり火草」

(三浦)

故山口健助君が折にふれて書きとめた文集(約60ページ)、交友関係の追想集、それに豊富な写真をいれてA5百二十八ページの美しい本だ、故人の一周忌のために一枝夫人がまとめられたものだ。

労働運動に活躍した青春の記録については堀江磯吉君が書いているが、この随筆的な遺稿によって、リベルテールの一九七五年九月、十一月に出た「東印再建記」はその自伝の一部となるものだったことがわかる。アナキストの労働組合運動に大きな足跡を残した山口君の戦後の生活がこの本で描かれている。旧知の人々の一読をすすめる。

発行者 新潟市桃山一〇四 山口一枝

●海外だより

※ 海外より送呈されるアナキスト誌は最近かならずスペイン関係の記事を掲載している。これについて多いのがムーレイ夫妻の事件、あとはさまざまである。住民

運動、市民運動、消費者運動その他についても散見されるし、ときには芸術論も発表されている。次号では前者を主として取りあげることにする。

※ ロンドンに「社会主義のための音楽」という組織があるらしい。私はかねがねアナキズムの音楽は可能か、ということを考えていたので興味を覚えたが、あまり参考にはならなかった。いくつかの問題点を提出している程度である。一、二あげておく。「革命的音楽は形態と技術において革命的であらねばならないか」「社会主義運動にとり、音楽は第一に、なんらかの予め決められた政策の宣伝用具として奉仕せねばならないのか」「音楽は新しい革命政策を決定するのに役立つことができるのか」。

アナキズム文学については日本語でもいくつかの論稿があるのに、アナキズム音楽については内外ともないようだ。マルクス主義音楽論は主張されており、すでに翻訳も刊行されている。

※ 「フリーダム」五月一四日の記事なので情報は少し古いが、同誌からムーレイ夫妻の減刑について伝えておく。もともと夫妻とも死刑を宣告されていたところ、夫のノエルはすでに昨年一二月に無期禁固に減刑されていたが、妻のマリーが無期懲役に減刑された。いずれも

再審である。ノエルの減刑は「発砲を承認したのはマリ
ーである」からで、マリリーの減刑は彼女に故意（犯意）
がない、つまり彼女の表象していた内容と実際に生じた
事実とに錯誤があり、アイルランド刑法によると死刑は
「国家に対する犯罪」に限定されているからである（被
害者は公務外で当時民間人の服装をしていた）、という
理由である。ムーレイ擁護委員会は夫妻の釈放のために
闘争を継続する決意であり、死刑を取り消したアイルラ
ンド政府は今度は全面降服するであろう、と強調してい
る。今一人の被告であるローナン・ステンソンは裁判に
かけられることなく勾留され、拷問されたが、すでに釈
放されている。

ムーレイ夫妻の事件がフレイム・アップされた経過に
ついては五月号の海外だよりを参照されたい。

※ スペイン関係で目についたのはおなじみのホセ・
ペイラーツ「スペインの状況」で、若い世代のリベルテ
ール運動に期待を寄せ、まもなくこの希望が達成される
であろうとしつつ、共産党を真の全体主義的反対、まご
うことなき帝国主義ときめつけている。またマイク・ハ
ーギス「CNTの合法化」では、春に三八年ぶりに合法
化されたCNTについて詳論している。CNTにとって
合法化は組織再建の一ステップにすぎず、戦闘的なアナ

ルコ・サンジカリストでない労働者がCNTに加盟しや
すくなるなどのメリットがある。合法化を求める政策は
政府の干渉を増大し、改良主義へ墮落するからというこ
とで反対の声もあり、それを看過するわけではないが十
分に警戒している。

※ 本誌一月号の三浦精一「石川三四郎と私」がドイ
ツ語とポルトガル語に翻訳されている。思うに、海外の
アナキスト誌は日本のアナキズムについての情報を待望
しているのではないだろうか。こうしたなかで、来日経
験のあるガルシアが日本のアナキズムの通史（イタリア
語、一九七六年刊、一四四頁）を語学のハンディキャッ
プを克服して刊行したことに心より拍手をおくりたい。
他日、本誌の国際版ができないであろうか。当座は夢の
また夢である。

（編・梅田順子）



☆ 雨つづきでお化けのキノコにでもなったような気がし
ています。米を借りにきた友人がいきましたが、貸してあ
げるだけの米があつたので、ほっとして「リベルテール」
七月号を拝読しました。「選挙さわぎ」に同感です。

うえたものです。

今度三重県度会町の「青雲荘」内宛にリベルテール
などお送り下さい。

（平井貞二さんより）

☆ 東京の長雨で湿って気分が悪いので、富士山麓の東円
寺という寺におまいりかたがた残暑をのがれています。
ご自愛のほど祈り

（関さんより）

☆ 残暑御健斗のこと、存じます。私もフラフラしながら
頑張っています。海外だより大変参考になっていますが
七月号の記事についてお尋ねしたので、梅田さんの電
話番号をさしつかえなければおしえていたくありませんか。

（大門一樹さんより）

『美術グラフ』望月桂特集号

丸山良策の「望月桂の素描」は数々の逸話を記して、
望月桂の人間性に改めて敬服させられる。『リベルテール』
望月桂追悼号にのった古河三樹松、望月百合子の原
稿、『漫文漫画』の大杉栄と堺利彦の序文、林泉の「読
売時代の望月桂」、望月明美「沈黙の対話」、望月桂独
語「年表」が掲載されている。

油彩、水彩、水墨の見事な作品廿数点の写真があるが
画風の幅広さにも感嘆させられる。絵の好きな豚嬢も、
「望月さんて、偉い人だったんだね」と感じ入っていた。

「政治」なんてと思うようになった日から、選挙とは無
関係のつもりです。またこの世の中のこととはさっぱり判
りませんが、判らないでもいいと思っています。

（高木護さんより）

☆ 「都会の空気は人間を自由にする」という言葉があつ
たかうに記憶しています。田舎の空気はそれに反して自
由であることを意識することすら忘れさせるようで、「日
日は好日」という気分しか与えてくれません。政治が経
済が移りゆく次第を新聞で見ているながらも、自分とは無
縁な関係ではないかと錯覚する程です。

実はこの錯覚するという事態そのものが危険なのでし
ょうが。「……から自由である」という関係、個と他との
関係の中での自由でしょう。政治という世界が昔程、劇
的な意味を喪失しはじめている現在、自由を確認する場
合は、絶えざる自己検証の場ではないでしょうか……

（大平智円さんより）

☆ 秋立つ頃、何かと忙しい事と拝察致します。当方にと
っては、引越し、お盆、33回終戦記念忌と重なって何か
と心忙がしい事です。さて岡山県玉野市由良病院入院中
は、色々お世話になり有難うございました。大阪から岡
山県に移住したのは一九五七年六月22〜23日午后四時の
西日本協議会以来ですから、長い期間、中国地方に腰を

中国無政府主義試論 (6)

劉師復

「資料1」についての補足的記述

同盟会会員の師復が香軍を領導したのではなく、後に心社を興した際の友人達であつたとしても、彼の政治的軍事的活動はそこで終つた。資料1によれば、「パリで唱導されていた八新世紀Vの無政府主義を研究し、極めて精進した」とある。そこで彼の思索と活動のルーツは社会主義に向つたのであり、その時期は「民声」が一九一三年に創刊されているから、大体一九一〇—一二年の頃と推定できよう。中国では何時頃から西洋社会主義が導入されたかは色々な見解がある。確かな事は「立憲派分子が一九〇三年、日本人の著作で社会主義に関するものを翻訳した。それは福井准造著の八近世の社会主義である。たゞしこれは資産階級の注意を引いたのみで、社会問題の中にある「ひそかな萌芽」を予防する意味の憂国の書であつた。それはまた梁啓超の改良主義思想とも符合するのである。一九〇六年以後になると同盟会機関誌八民報Vが中国革命問題を論じる中で取上げ、梁啓

るのだ！」

孫文にとつて民生主義とは社会主義の別名であり、その主な内容は地権の平等（土地に対する均等な権利）であつた。機関誌民報の目録をみると大別して自由民権に関するもの、種族革命のアジテーション、政府論、トルコ、ベルシヤ革命の報告記に交じつて「無政府党と革命党の説明」（葉夏声）、「クロボトキン著シベリア紀行」（周作人訳）、「社会主義四大綱、無政府主義之二派、虚無党史」（廖仲愷）、「帝王暗殺之時代、ソフヒア伝、バクーニ伝」（尤首）等が見受けられる。また掲載写真の項では第三期の民報には「無政府党首創者巴枯寧（ミツシエル バクーニン）」が見える。要するにこの時期に紹介された社会主義は、虚無党であり、無政府主義で、丁度日本で自由民権運動の時代に虚無党談議があり、東洋社会党が起きたのと比較されよう。既に「日本社会主義史」の中で石川三四郎は言っている。

「彼等は（東洋社会党のこと）未だマルクス、エンゲルスを読まざりき。彼等は未だバクーニン、クロボトキンを読まざりき。彼等は未だ近世労働者運動の最大動機、最大要素たる経済組織、即ち近世生産分配に就て、深く考量する所なく、甚だ通曉する所なかりき。故に彼等の運動を以て、直ちに厳正の意義に於ける、社会主義若く

超流の、社会主義に反対する部分が展開された」この資料からみる通り、一九〇〇年代から導入されている。またこの時期にいち早く社会主義思想を理解し、政府のない大同社会を構想した康有為の八大同書Vは仏教的思维と儒学の教養をちりばめた不思議な書で、今日の評家は空想的社会主義だと論評している。（朱其華著・中国近代社会史解剖、黎澍著・近代史論叢）。とはいへ康の場合の「無政府」は軍閥のはびこる無秩序として理解されて居り、彼の政治信条とは経庭があるのは興味深い。その点では八民報Vに拠つた人びとの見解も同じである。

既に一九〇五年発刊の辞の中で孫文は「民主主義が廿世紀の独擅場だ」と指摘し、「欧米は強固だがその民衆は実に貧しい。ゼネスト、無政府党、社会党が日々燃えになり、社会革命は遠からず来るだろう。中国が欧米にならえば、第二次革命をしなければならぬだろう。だから後から追いかける者は、いつまでたつても追いつけないのではないだろうか？ 欧米社会の禍は数十年たつて今ようやく鮮明になり、しかもこれを除去することが出来ないのだ。わが国は民生主義者が治めるのだから、最先に発達し、禍は萌芽のうちに除き、政治革命、社会革命を一挙にやれば、その成果も一度にあらがり、ひるがえつて欧米をみると、彼等は（われわれの背後で）瞠目す

は無政府主義の運動と同一なりと断ずべからずも、少くとも日本社会党運動の爲に其先を為せること、猶ほワイトリング、フイヒテ等が独逸社会運動の先を為し、フリーエ、サンシモン等が仏国社会運動の先を為せると同一の観なくんばあらず」

石川説を好意的に見れば、東洋社会党の設立趣意は「道德」の改良にあつたのだし、その点ではワイトリングがプロテスタンチズムに、フリーエ、サンシモン共にカトリックに社会主義の倫理規範を求めていたのだから、指摘は正しいと認められよう。中国ではそれを大同思想に求めた。一九二〇年九月一日号の「新青年」誌上で蔡元培は「社会主義史序」を寄せ、

「われわれの中国にはもとから一種の社会主義があつた。論語には「国があり、家のある者は、乏ぼしいのを憂うのではなく、均くなくいのを憂うのである。貧しいのを憂えず、不安を憂うのだ。けだし均しければ貧しくなく、乏しくなければ不安に傾くことはない。遠い国の人々が服従しなければ、自らは文徳を修めると、その人も服従するようになり、安心である」これは国内的には貧富を均一にし、対外的には武力主義を取らず、植民政策を興すことである……（このあと元培は礼記や孟子説をあげ中国には古くから社会政策があつたと述べ）

西洋の社会主義は、二十年前やつと中国に輸入された。一方は日本への留学生によつて日本から間接的に入ってきた。訳本に「近世社会主義」等がある。もう一つの方面はフランス留学生がフランスから直輸入したもので「新世紀」週刊誌上であつた。その後「民声」週刊誌でも簡単な紹介があつた。ロシアのボルシェビキ政府が成立してからは、マルクス学説を紹介する人が多くなつた。日刊であれ、月刊であれこの題目をみないのはまれである。しかし切実なのは欧州社会主義の発生以来の経過状況を叙述したものが、未だにないことだ。(彼はこのあと友人李達の訳したカーカプの社会主義史をあげ一九一三年までの社会主義の状況は右の様子だつたと言ふ。)

蔡元培が記している日本留学生の出した雑誌とは天義報のことで一九〇七年東京で劉光漢(師培)その妻何殷震の出したもの。またパリでは「新世紀」一九〇六年、張人傑、吳敬恆、李煜海(石會)が出版したものである。なおマルクス主義の最初の中国的発言は李大釗の「庶民の勝利」と「ボルシェビキの勝利」でいづれも一九一八年十一月十五日の「新青年」第5巻第5号であつた。

註*11 近代史論叢 黎澍著一九五六年学習雑誌社刊

なつて苦しみが新しい生活を発見して行つたようである。社会の理想について、私には「自由と解放」のほかに考えられるものはなく、そこに原点があつて、生きていくかぎり人間でありたい、生きるかぎり闘う良心から身もこころも離さない。しかも自由人でありたいと思いつづけてきた。」このしたたかな女丈夫ぶりは大切である。農村青年社事件を報じた上毛新聞では美貌をうたわれ、ホースキーパーと嘲けられ、それでも主義者に交じつて、連絡の任を果した八木さんは、今、板橋方面の養育院にいる。一読すれば、ここには彼女の生きた時代と精神が、それを分有した有名、無名の人びとの素描を通して感得できる。二号、三号と継続されるのを期待しよう。

あるはなく、なきは数添う 世の中に
あわれいずれの日まで歎かん 小町

(註)世にあるものはすべてなくなるもので、今ではなき数に入る人だけが加わつて行きますが、私などは何時までこんな風に、歎きを繰り返せばいいのでしょうか。

連絡先 東京都小平市花小金井南3

929

相京範昭 一部百五十円

※ 準備していた土田杏村についての小文がはみ出てしまいましたので、そこで用意していたお願いをこの欄を借りて広告します。どなたか加藤一夫『農本主義(理論篇)』を拝読させて頂けないでしょうか。加藤は組織篇、実践篇も執筆予定のようでしたが、刊行されたのならば、それもあわせてぜひ借用したく思います。土田杏村、権藤成卿、農本主義を日本のアナキズム史の外におくべきか否か、少し勉強しています。(WK)

誌紙拝見

☆あるはなく 知人の相京君が9月で83才になる八木秋子さんから聞き書きを集め、表記の通信を発売した。「発行にあたって」の文で八木さんは次のように言う。「昭和のはじめ、私は闘かう仲間とともにストライキ応援でやられた。……私は非合法の世界に転々と生活は移り、生きることの困難さを身をもつて知った。知れば知るほど、それは魅力のあるものとなり、生きる興味の素材と

☆遺言 No.5 9月16日大杉栄・伊藤野枝・橘宗一の虐殺された日として、定価五厘で出された本号では「うらみとゆるし」因藤莊一郎さんの記に迫力があふれる。老年なるが故にこれまで生きてきた自己の道筋での悔い、とまどい、錯誤を摘出し、自己を含めた民衆の在り方を訴えている。他に愚童書翰発見のいきさつ、富村順一さんへの手紙、朝日ジャーナルの△現代社会主義論争△に対するその民衆不在の、全く不毛であつたあの企画への公開状が含まれている。黒痴社/熊本県荒尾市宮内日岳九八二

☆WRI・JAPANは8月、広島への平和行進に参加し、既成団体にシテヤラレタの記を発表している。△演説会を貫く△のはわれらの活動遺産のうちにあるのだから、集会や行進は貫くべきだ。その心構えは岩佐の△アナキストの回想△の中にある。向井さんが若い人と共働して「山鹿泰治年譜」を作った。美しい製版で、内容も運動史(関西)として貴重だ。(文責 はしもと)

